

釣りに釣られて

高原英夫

第七回 「中国人と鱧を釣った」

「釣れますかなどと文王寄つてゆき」

川柳である。文王が寄つていったのはのちに太公望といわれた人物で、我々釣り師の代名詞にもなつていく呼び名である。

青森市に「太公堂」という釣り具屋さんがあつた。残念なことに今は無いが、「堂」と「望」その文字のかぶせ具合など、かなりいい線をいく名前のつけ方で、気に入つていた。

さてその太公望だが、本当の名前は呂尚という。相当の年齢で、また貧乏でもあつたらしい。だが、魚釣りが縁となり、川柳にでてくる文王、周という国の王と知り合つた。しかも文王の太公、つまり父の時代から国に隆盛をもたらしてくれる人物として待ち望んでいた方であるといつて、周の国に迎え、文王、そしてその子の武王の軍師になつた人物なのである。だから「太公望」なのだ。魚釣りをしていた川の名は渭水という。いまでいえば西安の西の方から流れてきて、やがて西安の東で

黄河と合流する。周の文王が寄つていったのも、当時、殷という国があり、その王である紂があまりにも暴君で周の国としてはなんとかしたいと思つてゐるころのことと思えばいい、今から三千年くらい前の話だ。

殷といえば、今から二千五百年くらい前にできたといわれ、世界史の教科書で習つた覚えがあると思うが、「商」とも呼ばれ、いわゆる、今でいうところの商人のものと意味を持つた国だということだ。すでにそれが国の中での商売のために人の往来があつたということを示すわけで、中国の奥深さにあらためて畏れ入る。

周の文王の子、武王の時代になつて、ついに太公望の献策のもと、討伐を決行、殷を滅ぼしたのである。だからいまでも、兵法や権謀術策について太公望をその始祖として語る訳である。

もうひとつ、太公望といえば、「六韜」という兵法書を著したとか、後の人が彼の話としてまとめたとかいわれているが、今は兵法というよりも、学生の時分に、なにげなく使つた「虎の巻」という言葉の元となつたその人なのである。

では、渭水で呂尚、太公望は何という名の魚を釣つていたのだろうか。これが私

にはわからない。ただ、渭水は西安の近くを流れていて、その西安の近くに半坡博物館という六千年くらい前の遺跡を展示した博物館がある。その掘り出された壺や鉢に魚の図案がたくさん描かれている。その魚が鋸歯状、つまりノコギリの歯の線とか、幾何学的に描かれていて、明らかに、漁業をしていたものと思われる。河と魚への畏敬の念が、こうした形となつて今に残っているのだと思う。

魚の形から名前がわかれば太公望が何を釣ろうとしていたかもわかると思うのだが。というのも、十年ほど前、仕事で中国に関する展示会をやったときのことだ。この博物館からも女性が随員として来ていて、展示品を返却に西安に行った時、彼女の職場である博物館を訪ねたのである。

ただ残念なことに魚の名前を聞くことは完全に頭から抜け落ちていて、広い館内を案内してもらったのであった。彼女の名前はパンフレットの設計のところの堂々と記されていた。改めて、「王さんあなたやったの」と聞いたたら、「そうだ」と答えた。また西安に行く機会があれば今度こそは確かめねばなるまい。

しかし、太公望にとつては、魚より国を釣るために、そこにいたのだという意味

も含めて、太公望の竿には針がついていなかったというような川柳もある。まあ、川柳は当然後々の人の話なわけで、どうこうということではない。

さて、その展覧会は「秦の始皇帝と兵馬俑展」というものだった。展覧会は大盛況だったし、それはこの話の主題ではない。

三人の中国からの随員、簡単にいえば、展覧会についてくる陝西省の考古学の関係者たちだ。青森には開催中と前後を含め一ヶ月以上してもらった。中には、先ほどの半坡博物館の王秀さん、秦俑博物館の王志友さん、陝西省考古研究所の張建林さんの三人だった。張さんは日本語ができ、通訳兼三人のリーダー的存在であった。

話は硬いことではない。一ヶ月もただじつと会場にいるわけにはいかない。解説などもしてもらったものの、日本語ができる張さんひとりですべてを全部こなすというわけにもいかない。私もひと通り覚えたことをもとに、何度となく説明役をやった。

休みに何をしてあげたらいいのかと思っただけだが、私は釣りが好きだし、三人

を船にのせ陸奥湾を走り、釣りをしてもらうことに、実はとづくに決めていた。

初めての休みに夏泊半島まで連れて行った時のこと、三人は車から降りるなり海辺に走り、海水に手をつけ、それをちよつとなめた。

「しよっぱい」

満面の笑顔でそう言っているのが、通訳をしてもらわなくてもわかった。全く思いもしなかった。海はしよっぱいのだ。確かに西安は中国の陸地のご真ん中で、海など初めて見るのだったろう。いや、飛行機の上からは見えただろうから、自分の手で、舌で感じるのは初めてだったのだ。その姿がほほえましく、絶対船に乗っての「釣り」をしてもらうのだと決めた。

しかし、三人を船酔いさせてはいけなし、じつくり天気を見定めた上でのこととなった。ベタ風の日、蟹田の漁港から漁船を出した。釣りは簡単なキス釣りにした。もちろん、竿も仕掛けも弁当も万端準備し、同僚のSさんも世話係りに同乗した。

まずは陸奥湾を東に一直線に脇野沢に向い、鯛島のまわりを見、次に仏ヶ浦に向

い、そこで陸に上がり、しばらくは観光の時間となった。白くそびえる奇岩に大喜びしてくれた。さて、仏ヶ浦を出ると少し北へ向った。フクラゲが跳ねていたのが見えたのである。船頭はすぐ船の中から仕掛けを取り出し、跳ねたあたりに流すのだが、フクラゲはかかってこなかった。その日、夕方にはホテル青森で三人のための夕食会がセットされていた。それまでには戻らなければならぬ。時間を調整しながら蟹田へ向った。蟹田沖まで戻りいよいよキス釣りを始めた。沖といつても、岸までエンジンをもうひと蒸せもすれば陸にぶつかると。そんな近さでもう蟹田はすぐそこである。釣れた、釣れた。私とSさんはエサをつけてあげたり、投げ込み方もまだやったことがないのは当然なので、それもこれもと大忙しとなった。投げればすぐ釣れる。キャツキャと大きすぎなのである。しかも型もバッチリ、肘たたきともいう刺身にもなる大きなキスもたくさん釣れた。

夕方の会食のこともあり一時間ちよつとのものだったが、十分な釣果となった。

この日は夕食会なので、釣ったキスは私の家に置いておき、翌日に全員で我が家でテンプラ、刺身で食べようということにした。

翌日、我が家で家族と一緒にキスづくしの会食となった。何しろ海で自分が釣ったキスである。本当に喜んで、

「チエンハオチー真好吃！（ほんとうにうまい）」といって食べてくれた。

文化は文化で知らなければならぬ事はたくさんある。海で釣るといことが、こんなに思い出に残ることになるなどとは思ひもなかった。陸奥湾を一直線に走る漁船、そしてあとに残る白い航跡、真つ青な海。船頭さんは舵をひとりひとりに軽く握らせ、時に右に左に曲がると、ワァーと歓声をあげた。要は、人と人が同じ目線で、同じ体験をしてみることだ。中国語で言おうが、何で言おうが、笑顔でわかるのだ。

また三人と会える日には、あの時の釣りの話で盛り上がることは間違いない。

そして、一生語り合える大事な体験が、私のこの胸の内で、いつもフツフツと沸いているのだ。

平成23年3月